

## ゴッホの読書

佐道直身

ゴッホが晩年の2年半の間に弟テオにあてた手紙はすべてフランス語で書かれている。大半はむろん母国語であるオランダ語で書いている。いつからフランス語で書き出したのか。1886年からの2年間、ゴッホは弟の働いているパリに来て一緒に暮らすようになる。当然この間二人の間で手紙の交換はなくなる。そしてこの2年の間にフランスの画家たちと交流してフランス語の力は進捗するのだが、その後南仏のアルルに去って以降ゴッホはフランス語で便りをするようになるのである。しかしなぜ弟にフランス語で書かねばならなかったのだろうか。ふだん話すときはオランダ語を使っていたのが。後にテオの妻となるヨーは二人がフランス語で文通していることを知って怪訝に思ったということである。

以前にも一度ゴッホは弟にフランス語で手紙を書きはじめたことがあった。それは1879年、炭鉱で持ち出しで説教師をしていた時期、ぶらぶらしてないで地道に職人にでもなったらどうかという弟の忠言にゴッホが自尊心を傷つけられ、翌年の7月まで絶交状態が続くということがあったのだが（そしてゴッホが画家になる決心を固めたのもこの時期といわれている）、そのあと再び文通がはじまったときにやはりフランス語で書き始めているのである。これは半年たらず（7通）しか続かなかった。弟に対してばつの悪い思いがあるときは母国語では書きづらいのかもしれない。この7通の最初の1通でゴッホは興味深いことに次のように書き出している、「いくぶんぼくにとっておまえは外国人となってしまった。」(I.188)<sup>(1)</sup> パリを出てアルルに去ったのも、これ以上弟と同居していると仲が険悪になるかもしれないというぎりぎりの状態にあった

のではなかったか。もちろんフランス語の訓練という側面もあったろうが、フランス語でのほうがかえって自由にいいたいことを（照れくさいことも）いえたのかもしれない。

彼のフランス語は、ことに条件法に関して変則（つまり文法上の誤り）があるとはいえ、また文章自体もごつごつして読みにくいということがあるとはいえ、ほとんど普通のフランス人のものと見まごうほどである。むろん、インテリフランス人というわけには行かない。難しい言い回しをつかいはするが、弟に半年ほど遅れて妹に対してもフランス語で書き始める。慣れてしまったのだろう。「フランス語で書かせてもらえればほんとうにぼくの手紙の手間が省ける」(III.229)という。ただ彼がそうして急速に力を蓄えたフランス語で手紙を書けたのはわずか2年半だけだったのだが。

ゴッホはどのようにして語学力を高めたのか。ことに性格が狷介で人づきあいの悪かった彼が。<sup>(2)</sup>（とはいえ人恋しさは人一倍だったようだ、友人も多く、彼らの動向も気にかけていたようである、ただ人づきあいが苦手だっただけである。）もちろんオランダという地政学上の理由で複数の外国語を習うことは普通というお国柄はあったろうが、語学の才能に恵まれていたというわけではない。神学校を目指して受験勉強していたときは、ラテン語やギリシャ語ではかなり苦労しているようだ。仏語習得には読書の効果が大きかったろう。ゴッホは初めから絵描き一本槍の人だったわけではなく、小さいころは学校の成績はよくないが読書好きの少年だった。彼が23歳のとき画商を怠惰でクビになったのも、失恋のほかには本好きが影響している。その翌年から書店に勤め出したのも読書の便があると勘違いしたからだ（ちなみにこの二つの仕事の間に彼はイギリスでフランス語の基礎を教えている）。若いころすでに、「ぼくにはかなりの逆らいがたい読書癖がある。いわばちょうどパンを食べる欲求があるように、つねに知識を得て、勉強したいという欲求がある。」(I.189)とっている。後年の書簡の中でも「晩に1、2時間読書するのはどちらかという習慣になっている」(III.106)という。

ゴッホはどんな本を読んでいたのか、本だけでなく雑誌もよく読んでいる、書簡集に名のある雑誌の種類は20種をこえる。とはいえこれは中の口絵が目当てのことが多い。アルフレド・サンシエ等の絵画関係の評論、アルマン・カッサーニュ等の教則本<sup>(3)</sup>も少なからずある。ゴッホが画家を目指したころの当面の目標は本や雑誌のイラストレーターになることだった。だから挿絵本も熱心に収集している。

10代の愛読書は『聖書』を別格として、ケンピスの『イエスにならいて』、バンヤンの『天路歷程』、ボシュエの『説教集』、ルナンの『イエスの生涯』、ユゴーの『ノートル・ダム・ド・パリ』、シェークスピアの史劇、ミシュレの一連の博物誌等だった。

ごく若いころは詩が好きだったようで、オランダ語やドイツ語のものが多  
い。

後年になると小説を読むことを好むようになり、英語とフランス語のものが多くなる。最初イギリス勤務だった関係からだろう、20代前後にはジョージ・エリオットとチャールズ・ディケンズの名が頻出する。フランスものでは、ユゴー、バルザック、エルクマン＝シャトリアンの名が散見される。バルザックに関していえば、「全作を読み返そうと思っている」(III.133) といっている。だが純粋な恋愛小説である初期の名作『谷間の百合』の記述はない。

そのうちフランスものは近い年に発行された現代作家のものを多く読むことになる。ゴッホは、1880年代の自然主義隆盛のころの名作にリアルタイムで接することのできる幸運をもった人だった。すなわちゾラ、モーパッサン、ゴンクール、ドーデ、ユイスマンス、ロチ。ことに最初の3人の作品に対する敬意の念は強かった。

「ゾラ、モーパッサン、ゴンクールはできるだけ細大もらさず読んでしまっ  
てなければならぬ、現代小説というものをもう少しはっきり見極めようとす  
るなら。」(III.189)

ゴッホの肖像画や静物画には絵のなかに小説本そのものが描き込まれること

がよくある。そのなかで題名が読み取れるのはまさに、ゾラの『生きる喜び』（2度）『ボヌール・デ・ダム百貨店』、モーパッサンの『ベラミ』、ゴンクール『娼婦エリザ』『ジェルミニー・ラセルトゥー』（2度）『マネット・サロモン』、リシュパンの『立派な人々』であり、外国ものでは、ディケンズの『クリスマス物語』、ストー夫人の『アンクル・トム的小屋』がある。詳しくは注に譲ることにする。<sup>(4)</sup>

フローベールの名も出てくるが、他の作家より特別視するようなそぶりはない、作品としては『ボヴァリー夫人』『サランボー』の書名が挙がる以外、二人の楽天的な中年男が主人公であるところの『ブヴァールとペキュシェ』を話題にすることが多い、ということは彼が小説の方法論やフランス語の美しさに魅せられて読んでいるのではなく、話の教訓性、即物性にひかれて読んでいることがわかる。

それ以外で彼が読んでいるのは、ジャン・リシュパン、エルクマン＝シャトリアン以外には、ジョルジュ・オネ、リュドヴィック・アレヴィ、アンリ・ミュルジェルといった文学史には出てこない当時の流行作家だが、これらについては、エルクマン＝シャトリアン以外はゴッホ自身特別のコメントをしていることは少ない。

耳切り事件があってから当然ゴッホは何カ月か本を読んでいなかったが、翌年4月になって初めて読んだのが、やはり出版されたばかりの『土地の人々』というコント集だった。作者のカミーユ・ルモニエはこのジャンルの名手で、森鷗外が翻訳した小品のなかにも彼の短編がひとつある（「聖ニコラウスの夜」）。

このように挙げて行っても枚挙にいとまがないので、特に彼が愛着を持った二、三の作品について論じることにする。その他彼の読んだ英仏語の文学作品については注にまとめておくことにする。<sup>(5)</sup>

## ミシュレ『愛』

ゴッホの書簡集で最初にフランスの文学作品が引用されるのは、ミシュレの『愛』である。この本への言及、引用はいたって数多い。いったいこの本のどこにゴッホはひかれたのだろうか。

そもそも『愛』はミシュレが2年あまりをかけた力作であって、1858年に出版されている。50代の終わりに書かれたにしては完全にロマン主義の系列に入る作品であって、読んでいるほうが恥ずかしくなるようなくだりも多い。ひとことかというと、絶対的な女性讃歌であり、男のための「結婚ノススメ」である。あまり知られている書でないから少し長めに引用してみる。

「きみが窓辺で育てている青白い二輪の花と花の間に、パリの煙のなかに、第三の花が、もっともそれは一人の女だが……、将来のきみの婚約者の漠とした軽やかな面影が、現れることはまちがいない。

彼女はまだ少し若すぎる。多分十三歳で、きみは二十歳だろうか。彼女ももっと大きくなる必要がある。しかしかに若すぎるといっても、きみが心から彼女のことを考えていれば、彼女はきみの父親やきみの母親よりもずっとよくきみを守ってくれるはずである。厳しいのだから、この少女は。彼女は莫迦なことを許さない。そんな考えがきみの頭をよぎると、いみじくも彼女の仕草がきみにこう語るだろう。『だめよ。出掛けないで、私のためにお仕事をしてよ』。

私はこういう愛らしい影法師を、守護者として指導者として、教師あるいは傅育係として、きみに与える。彼女が十七歳か十八歳になれば、その役割は変わるのだ。結婚してきみの家にくるようになると、こんどはきみが彼女の主人であることが、とてもすばらしいとても楽しいことに思われてくるのである。

そのとききみは神に感謝するだろう。神の創意にとめる慈愛がきみのために女を造ったのだ。聖なる矛盾の奇跡である女を。」(中公文庫、森井真訳、p.46-47)

ここにあるミシュレの思想は、女は世間を知らないでいてくれたほうが男にとってはありがたいし、女自身もそうしたほうが幸せだということ、いわば現代版『女の学校』である。

「なぜほかに楽しみをさがすのか。愛する妻のほかにどんな楽しみがあるというのか。」(p.61)

「自らの手で調理したじつにおいしい御馳走を、彼女は口で軽く触れて唇で聖化する。それを持ってきて、ほほえみながらこう言うのだ。『あなた召上って。お毒味したわよ!』」(p.126)

「彼女は若いけれども、もうその日から、神のもろもろの善き業のために役立つものに彼女を創造し、調和と慰めと癒しと救いとの方である女に本当になるように、彼女を仕込まねばならない。」(p.156)

「私は常にこの世に『愛』の宗教を奉じてきたし、それを弘めようと願ってきたのだ。」(p.303)

ゴッホが結婚を憧れたであろうこと、それによってキリスト教信者としても立派に生きることができるのだという確信を持ったであろうことが、容易に想像できる。

1873年8月ゴッホは転勤したロンドンの下宿先の娘、アーシュラと出会っている。そしてゴッホは運命の女性と出会ったと信じた。しかし、神によみされた結婚生活をともに送るべき女性はすでに婚約していた。伝記作者によると74年7月ごろゴッホはアーシュラに求愛したがそっけなく拒否され、直後に帰省する。フィンセントの落胆しきった様子に両親は、それまで(おそらくミシュレに影響されて書かれた)楽天的な手紙を受け取ってきただけに危惧の念を抱く。ロンドンに戻るとき妹のアンが連れだって行ったのも、不安を感じた両親がつけて行かせたらしい。フィンセント本人は、なにか妹の就職口を見つけるためと信じ込まされていたふしがある。二人が移るはずになっていた下宿

について「そのうちもっと詳しく知らせるから」という8月10日付の手紙を最後に、翌年の2月までのゴッホの書簡は一切残っていない。妹という語り相手がいたためか、失恋の思いの深さからか。

とはいえ妄想のように広がっていた夢はおそらくこれで急に破れてしまったわけではない。帰省中にごく短い手紙を出した後、この8月10日付の手紙を書くまでに2通のこれも比較的短い手紙を出している。その両方で「この本は僕にとって啓示となった」(I.26)と『愛』のことを書いている。「愛の中には、人々が愛の中に求める習慣になっている事柄よりもっと多くのことがある」ということを教えてくれるという。『愛』への信仰がはまだ衰えていないことを示しているように見える。

この失恋事件でにわかには働き振りの悪くなったゴッホに対して、会社側はその年の秋に彼をパリに転勤させるのだが、クリスマス休暇でロンドンに戻ったゴッホは、再度の求婚を試みる。この2度目の失望がおそらく彼にとっては決定的だったのだろう。翌年9月の手紙のなかに「クリスマス以来どんなに苦しんできたか」(I.42)と短く記している。

このクリスマスをはさむ半年間の沈黙が続いたあと初めてゴッホが弟に出した手紙は、「お前の本をとうとう一杯にしたよ」ではじまる。この唐突な書きだしは、この間兄弟の間に何らかの交通はあったはずであることを示唆しているが、おそらくは彼女との別離と失恋とがこの長い沈黙を強いたのであろう。

この本とはゴッホが弟のために詩歌を抜き書きした手帳のことである。この手帳はゴッホ美術館に残っている。この手帳は2冊目で、1冊目はおそらく1870年ごろにハーグ勤務のときに写されたといわれている。1冊目には3人のフランス作家が抜粋されており、詩人のジョゼフ・オートラン(1813-1877)、サント＝ブーヴの詩編が含まれ、散文としてはミシュレの『海』と『鳥』の抜粋が、30ページほど几帳面な文字で写されていた。<sup>(6)</sup>

問題の2冊目のほうは、分量も約70ページで、言語も英独仏にわたるようになる。知られた作家としては、ミュッセ(「十二月の夜」)、サント＝ブーヴ

(『ミュッセ論』)、ルナン (『イエスの生涯』)、テーヌ (『ピレネー旅行』)、カーライル (『過去と現在』『英雄論』)、ロングフェロー、ハイネ (『歌の本』)、ゲーテの名が見られる。<sup>(7)</sup> このなかで、ミシュレの『愛』については第5章「愛のよみがえり」の第4節から第8節にかけて (中公文庫版では322～344ページ) の抜粋が筆写されている。その一部はテオへの手紙のなかでも筆写されている。ただしこれは、先に長々引用した前半の結婚の幸福を述べた部分ではなく、女性の精神性を強調する叙述が含まれている。たとえば第4節などは「老いた女性など決していない」(邦訳では「老いた妻なんて決してありえない」と題されているように、彼が懂れていた愛は肉的な要素はほとんどなく、霊的なものだったということを裏書きしているようである。

第5章にある印象的な文句をいくつかを挙げてみる。

「中世の無知な芸術は若さと美とを同一視していたので、聖母でも子娘をモデルにした。近代の大画家は美とはそれなりの成熟が必要だとわかってきた。」

「自分を美しくするのは自分の責任である。」

『「奥さんは美しくはなかったが、今は美しい。愛してこられたからです。」』

彼はことに「秋を渴望して」の一節を賞賛する。これはすでに73年10月の友人あての手紙 (I.19) の中でその一部を書き写している。ジョーンズ夫人宅の寄せ書き帳でも引用されることになる。<sup>(8)</sup> 後述するようにゴッホは弟に読書をやめるよう勧めるが、「ただしフィリップ・ド・シャンペーニュ作の婦人像に関するミシュレの一頁は忘れてはならない」(I.46) とつけくわえる。その一節が次である。

「ここからひとりの婦人がみえる。物思いにふけりながら、早くに花は枯れたものの木陰ある狭い庭のなかを歩くのが見える、ちょうどフランスの断崖やオランダの砂丘の裏に見るような。異国の小木はすでに温室のなかに入ってし



まった。落葉で銅像がいくつか見えるようになった。この贅沢な芸術作品は、謙虚で、重々しいこの婦人のごく質素な装いと対照的だ、黒（というか灰）のシルク地が、藤色の地味なりボンをアクセントにただけの。

しかし彼女をいちどアムステルダムかハーグの美術館で見かけたことはなかったか。彼女は（ルーヴルにある）フィリップ・ド・シャンペーニュ作の婦人像を思い起こさせる。その純白で貞節で、十分に知的だが素朴でもあり、世の手練手管をあやつるほどの才知はないその姿は、私の心のなかにずっと入り込んでいた。この女性は30年間私のなかに居続け、執拗に現われ来ては私の氣を揉ませ、私に思わず言わせてしまうのだ、『この人は何という名だろう。どんなことが彼女の身に起こったろう。彼女はいくらかは幸せな人生を送ったろうか。人生をうまく切り抜けて行ったろうか』と。」(I.19)<sup>(9)</sup>

なぜゴッホはこの文章にひかれたのであろうか。ただこの文章を読んでいるとこれがミシュレの筆になるものであることを忘れて、ゴッホの思いを読んでいる感に襲われてしまう。この婦人は先に引用した架空の少女が年を重ねた姿であり、ゴッホはド・シャンペーニュの婦人像の複製を所持していた。おそらくは彼の習慣にしたがって壁に掛けていたろう。彼にとって衝撃的だったのは、真の絵とは描かれた人物の後ろに生身の人間と同じく人生が広がっているということだった。あるいはこの婦人はアーシュラに似ていたかもしれない。

おそらく沈黙のこの期間、彼は名文の筆写に没頭していたはずである。どのように苦悩に耐えていたか。あるいはこれは写経のような作用を及ぼしていたのかもしれない。自分の満たされぬ思いを理想の女性像のなかに封じ込めようとしているかにもみえる。

失恋から1年たった75年9月8日、弟に「おそらくおまえを驚かすだろうことを言おうと思う。もうミシュレは読むな、聖書を除いて他の本も、クリスマスに会うまで」(I.40) といっている。そうして父からの手紙の一節「悲しみは悪いことではない、反対に、物事を聖なる目で見させてくれる」とか、「若

さとは虚栄でしかない」という言葉を引用している。だがこの22歳の若者に若さの持つ虚栄を克服できたのだろうか。

9月25日の手紙では、「僕はミシュレのすべての本からおさらばしようと思っている。おまえもそうしなさい。クリスマス以来どんなに苦しんできたか」(I.42)という。この文面の前にゴッホは第二コリント書を引用している。「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」(5章17節)<sup>(10)</sup>ゴッホはこの失恋の危機を宗教によって乗り越えようとしているようである。

10月11日には「ミシュレやルナンなどの本はもうしまってしまったかい。それはおまえには休息になると思う。」そして教訓はやはり聖書のなかにあった。このあと、『蜜を食べすぎではいけない。蜜を食べすぎると味が悪くなる。』(箴言、25章16節)(I.46)と続く。

頭で理想を並べるのではなく、個々の現実を直視してゆこう、そうしたものをこれからは読んでいこうという、これは意思表示にみえる。そして彼が弟に勧めたのは、エルクマン＝シャトリアンの小説だった。聖書以外は読むなどいっておいて2ヵ月もたっていない。エルクマン＝シャトリアンとは二人の作家で、共作で“民衆小説”とか“国民小説”とか呼ばれた一連の帝政期風俗を写實的に描いた小説を書いた。

「手にはいるならこれらの本を読みなさい。食べ物が変わると食欲もわいてくるというものだ。(ことに質素に食べようとするのなら。『われらに日々のパンをお与え下さい』というの、わけのないことではない。弓はいつも張り切ったままではいられない。』(I.46)

ゴッホが本を日々のパンとして捉えていたこと、そこにあるべきなのは人生の格言ではなく、個々の人間の個々の事実であると考えはじめたこと、それともなって自然主義文学に没頭していきだしたことが、わかる。

## ゴッホの楽天主義

ゴッホの一生は外国に出ては失敗して故郷に戻ってくるという生活の繰り返しだったのであるが、書簡集の編者の言によれば、「この『フィンセント自身によるフィンセントの生涯』を追ってみておそらく最も衝撃的なのは、彼の打ち続く経験が彼の後の行動にいかなる影響も与えていないことに気付くことである。つまり、新しい固定観念が彼の頭に住みつくたびに、以前の試みがみな無残な失敗に終わってしまったことなどまったくなかったかのように、そのことに夢中になってしまうのである。」(I.293)

このことは一面彼の無神経、暴力性、執拗さを裏打ちしているようにみえる。実際ゴッホが女性を追うときはストーカーまがいであったし、炭鉱に入って説教する彼の捨て身のやり方は教会の人々には免職に値するほどのやりすぎとみえた。ただこれは情熱の裏返しであって、看病するときの彼は献身的で寝食を忘れるほどであった。ゴッホ自身この性格は自覚していた。このようなゴッホの傍若無人さは、自分が正しいと思えば年長者を年長者とも思わぬ一本気からきている。後年弟に金を無心するとき、画材の郵送費を気かけたり、割引の得られる店を指定したりして、弟の負担にならぬように心配りする神経とは対照的にみえる。あるいはいつの時点でか自己改造をしたのだろうか。

ゴッホには狂気のイメージがつきまとうが、手紙の上における限りそのような調子はない。ただそのエキセントリックな性格が初めて現われるのが、書簡集の153と154番の手紙であり、ただ弟には「この手紙はだれにも見せないように、いいね」と断わっている。ゴッホ家では親兄弟のあいだではあたりまえに自分に来た手紙を見せあっていたので、この注意はこの手紙の内容の異常性をゴッホも意識していたということである。当時恋に落ちた従姉妹のケートにプロポーズして手厳しく断わられたゴッホは、両親や親戚からあきらめると忠告されるが聞く耳を持たない。そしてこの手紙はいわばストーカーの自己正当化なのである。彼の恋愛哲学は、愛した以上求愛するのに出口を作っておかないこと、なぜなら彼女しかないのだから、というものだ。ミシュレの教えが極端

に増幅されて復活してきたように見える。

「ぼくは彼女が最後にはぼくを愛するようになるまで彼女を愛することに決めている。」(I.244)

「ぼくは打ちのめされたままになっている気はないし、ぼくがそれで武装しているところの希望を打ち捨てる気もない。」(I.246)

「ぼくの魂のいいような不安のなかから、一つの考えが、闇夜の一条の光のように湧いてきた。諦めうるものは諦めよ、しかし信じられるならば信じよ！と。」(I.247)

テオがどうやって生活していくのか聞いたときも次のような格言的な答えをしている、

「愛するものは生き、生きるものは働き、働くものはパンを得る。」(I.247)

親戚の人々の冷たい視線にも臆することはない。

「あの人たちは何をぐだぐだ言っているのだろう。“生活手段”だって。まるでぼくにはそれがないかのように。いったいどんな芸術家が苦労を重ねることもなく、窮乏することもなくすんだというのか」(I.267)

ここには挿絵画家としての道が今にも開けてくると安易に信じ込んでいるゴッホがいる。実際そのような獲らぬ狸の皮算用的発言は81、82年代の手紙に多い。

このことは彼の天性の楽天主義を証しているようにも見える。それは最初は気分的なものだったかもしれない。

「久しぶりにおまえに会って一緒に散歩したとき、かつて今よりずっと強く思っていたことを感じた。つまり、人生はぼくたちに何かしら善きものを、何かしら貴いものをもたらしてくれ、ぼくらはそれをしっかり味わえなくてはいけないということだ。」(I.185)

「ぼくはつねに、物事の文句なくよい側面をまず第一に考慮するように努め、悪い側面はその後で、それも心ならず考えるというふうにしている。」(I.242)

そしてこれは晩年になってはっきり身に備わった気質としてみられるもの

だ。初めての出産をひかえた弟の不安に対するゴッホの忠告の中に、こうした物事をいい方向に考えていこうとする傾向がみてとれる。

「彼女の妊娠のことを考えて、あたりまえにいろいろ心配ごとを抱えているほうが、独り身で家族の煩いごとなしでいるより、ずっと生きている実感があると思う。自然のなかにいる自分を感じるからだ。」(III.387)

ただ天性が楽天的であることと、楽天主義によって人生を乗り越えていこうとするのには違いがある。ゴッホ自身、生来楽観的な人生観をもっていたのだろうか。傍若無人ということは必ずしも楽天主義ということではない。上の引用のなかで、希望で「武装している」という言葉遣いは暗示的である。この傾向がもともと自身のうちにあったというよりは、こうした主義を必要としていたのではないか。そして自分の向こう見ずな性格を位置づけるのに格好の理論づけを発見したのではなからうか。

ところで、ゾラに対する全面的な賞賛と信頼のかたわらで、ゴッホは『カンディード』や『タルタラン』といった作品を弟や妹に奨めている。それはまさにこれらの作品に内在する楽観主義に、ゴッホ自身が人生の指針を見出したからと思われる。これらの本をいつごろ彼は発見したか。『カンディード』の名が出てきだすのはアルル時代からである。『アルプスのタルタラン』については、1885年の発刊だからパリ時代であった可能性が大きい。

ゴッホのタルタランへののめり込みぶりがわかるエピソードがある。四角形を思い浮かべてほしい。上辺左隅がタラスコン、右隅がサン＝レミ、下辺左隅がアルルというのがこの3都市の位置関係である。そしてこの四角形の中ほどがアルピーユ山脈に当たる。ゴッホはアルピーユ山のことを執拗にアルピーヌ山と記している(III.393)。実は『アルプスのタルタラン』のなかで、アルルの隣町であるタラスコンの奇怪で陽気な人物、タルタランがアルプス登頂を目指す話の都合上、アルピーユ山はアルピーヌ山に代えられている(アルプスの形容詞は男性形がアルパン、アルピーヌは女性形)。おそらくパリにいたゴッホは、作者の創作上の意図から改名されたものを、音が似ていることもあって

実際の地名と思い込んでいたと考えられる。

そしてこの書の中に、アルプスに向かう途中で知り合った自殺願望の強い外国青年をいさめる場面がある。

「彼はスエーデンの青年と哲学の議論の最中で、相手の悲観論を、周囲のすばらしい眺め、光と影とが大きな帯をなした牧場や、まぶしいばかりの万年雪を頂につけた濃い緑の森などを示しては打ち破ろうとしていたのである。」<sup>(11)</sup>

ちなみにゴッホの絵とはまさにこのタルタランの弁舌を絵筆で実践したものではないだろうか。ゴッホ自身は次のような自虐的な説明をしている。

「今のところ自然の豊かで壮麗な側面を描かねばと思っている。我々には、陽気さ、幸福感、希望、そして愛が必要だ。ほくが、醜男で爺臭く、陰険、病的、貧乏であればあるほど、ほくは色をあざやかにし、きれいに配合して、輝くばかりにすることで、仇をとるのだ。」(III.189)

ヴォルテールもしばしば書簡集で引き合いに出されることになる。耳きり事件のあった1週間後の新年にゴーギャンに宛てた手紙の中で、ゴッホは、「お願いする、すべてが最良に向かうこの最高の世の中にいかなる悪もないことを信じてほしい」(III.282)といている。この文句は『カンディード』の登場人物である楽天主義哲学者パングロスの決まり台詞である。その半年後テオが結婚してパリに連れてきた新婦が、慣れないパリ生活についてゴッホに不安をもちたところ、ここでも彼は「妹よ、この最高の世の中ですべては最良に向かうことを信じれば、パリも住めば最高の町だと思えるよ」(III.340)という返事を送っているのである。この文句は書簡集にこれ以外にも数回引用される。<sup>(12)</sup> パングロスの名はゴッホにとっては精神安定剤の役を果たしていたと思われるのである。

「最高の哲学者パングロスが、もしここにいれば、ほくに教えを垂れ、ほくの魂を静めてくれるのだが。」(III.128)

売れない画家について、

「おそらく彼らはパングロスを知らないか、あるいは知っていても、真の絶

望と深い苦悩による致命的な傷のゆえにすっかり忘れてしまっているのだ。だからこそ我々は楽天主義の名の下に、一種仏教の尻にくっついたようにみえる宗教にはまりこんでしまう。それは悪いことではない、それでよければいいんだ。」(III.329)

楽天主義は、教会に行かなくなって父親と大喧嘩したゴッホにとって、キリスト教にとって代わるほどの宗教になっていたといえる。

### 絵画と小説

すでに述べたようにゴッホは大の読書家だった。正確にいうと方法的な速読家であった。<sup>(13)</sup>ただ好きだから読んでいたといえればそれまでなのだが、絵に専心しているとはいいがたいほどの量の読書は、画家の彼にとってどんな意味をもっていたのだろうか。

彼が若年のころ読んでいた本は、『聖書』から始まって、ケンピスの『イエスにならいて』、バンヤンの『天路歷程』、ボシュエの『説教集』といった人生の指針を与えてくれる本だった。そしてそのことは大きな意味で生涯変わることはない。彼が根源的に読書に求めているものは人生の意味はなにかということである。手紙のなかで彼が書物から引用する文章は初期はほとんど聖書の引用であり、でなければ格言的なものが多い。そうした例を挙げていけばきりが無いが、たとえば、

「もうずっとずっと以前、『友フリッツ』のなかで年老いたラバンの発した警句を読んだことがある、それが何度も記憶のなかによりみがえってくる。『我々は幸福になるために生きているのではないが、幸福に値するようになるために努めなければならない。』(...) 絵を描くときも同じことだ、画家たるもの、絵の売れ行きを気にかけて描いてはならない。絵が絵としての価値と特質をもつようにすることが義務なのだ。」(I.503)

本は教え（蜜）を与えてくれるものだった。しかしこれからは日々のパンを求めようとする。彼が宗教書やミシュレを卒業して、いわば観念的な評論の読

書から、エルクマン＝シャトリアンを糸口とするより現実的な物語としての小説の読書に比重が移ったとき、彼本来の画家的感覚から本をみるようになる。そして個々の人物の描写、特色ある景色や場面の描写に関心の重点を移していく。そして未来の画家としてのゴッホの関心はまさに観念的でなく、視覚的だった。外の世界を絵画として見るのはもちろんとして、<sup>(14)</sup> 極端な言い方をすれば絵を見るのと小説を読むのとは彼にとって本質的な違いはなくなってきたかのようなのである。

「最近ドーデの『ナバブ』を読んだ。堂々たる作品だ。ナバブと銀行家エメルラングとの夕暮れのパール・ラ・シェーズ墓地での散歩、バルザックの銅像が空にシルエットで映って、上のほうから二人を見下ろしている場面、まるで一枚のドーミエだ。」(I.503)

有名な「夜のカフェー（フォーラム広場のカフェテラス）」(1888年10月アルル作)を描き終えたときにゴッホは弟に報告する。

「『ベラミ』の出だしはまさに星空のバリ、その大通りのイリュミネーション輝くカフェーの描写からはじまるのだが、ぼくがちょうど描きあげたのもほとんど同じ主題だ。」(III.189)

アルル時代、ゴッホは「タラスコンの馬車」という絵を描いている。これはまさに彼の愛読書である『タラスコンのタルタラン』の挿絵といえる。

小説を絵に例えるだけでなく、反対に、絵を小説に例えることもする。

たとえばドラクロアの模写をしていた時期、ドラクロア作のピエタのマリアを評して、ローマ彫刻風でなく、むしろジェルミニー・ラセルトゥー風だと形容している。(III.389)あるいは、

「ジュール・デュブレヤドヴィーニーもまたこうした考え（訳注：自然との一体感）を作品のなかで表現している。そうした効果にはいわく言い難い要素があって、自然全体が語り出すかのようなようになって、たとえばヴィクトル・ユゴーの作品を読み終えたような印象なのだ。」(I.519)

たとえば疲れ切った老馬の絵を見て、ナポレオン古参親衛隊がいった言葉



「衛兵死すとも降伏はせず」を連想する (I.173)。絵に文学を見、そして絵に文学味を施す。<sup>(15)</sup> この文学の素養は、文学をただ絵の主題とするだけの他の絵描きたちと違うところだろう。

次のような言い方はどうだろう。「書く」という動詞と「描く」という動詞にさほど違いはなさそうなのである。

「やっとヴィクトル・ユゴーの『93年』を読んだ。ドカンかジュール・デュブレが描いたように描かれ、いや書かれている。」 (I.515)

絵を描くという行為は詩を書くという行為よりイメージ喚起力があるとは限らぬとさえ彼は考えている。

「たとえばボナによるヴィクトル・ユゴーの肖像画、たしかにそれはすばらしい、しかしヴィクトル・ユゴー自身によって言葉で描かれたヴィクトル・ユゴー像のほうがずっとすばらしい、たとえそれが2行の詩句であろうと。

Et moi je me taisais

Tel que l'on voit se taire un coq sur la bruyère.」 (I.517)

妹にもいっている、

「音楽でもって慰めになることが言えるのと同じように、色を手際よく配合するだけで詩を語るができるということをおまへはわかってくれるだろうか。」 (III.273)

文学作品を比較する場合その基準になるのも画家の視点だ。ドーデの最新作を旧作と比べるとき、

『不滅の人』は色彩としては『タルタラン』に及ばないようだ。...『タルタラン』は真に偉大である、『カンディード』がそうであるように傑作の域に達した偉大さだ。」 (III.184)

ゴッホが小説の中に絵画の肥やしになるものを求めていたことは事実である。ゴッホの描いた農民の肖像画について、次のようにいう。

「良識ある人々はこの誇張にカリカチュアを見るだろう。しかしそれがどう

したというのだ。ほくたちは『大地』とか『ジェルミナール』を読んだ。だから農民を描くのだったら、この読書が少しは血となり肉となっていることを見せたいものだ。」(III.165)

小説の中にいわゆる「芸術」を求めていたのも事実である。

「おまえがゴンクールよりトルストイのほうが好きなのは結構だ。おまえはことに行動へのエネルギーを汲み取るために本を読むのだから。でもほくはそこにそれを創った芸術家を求めて本を読む。フランスの小説がこんなに好きなのは間違っているかな。」(III.389)<sup>(16)</sup>

しかし彼が心の奥で小説に求めていたものは何といても失敗続きの人生に対抗するための武器、すなわち慰めではなかったかと思われる。

「今やっとドーデの『不滅の人』を読んでいる。とっても美しいと思うが、ちっとも慰めにならない。」(III.183)

「より慰めになるからリシュパンよりモーパッサンのほうがずっと好きだ。」(III.254)

こうしてゴッホが読書に求めた慰めが、実はゴッホの絵画のあり方と深くつながっている。

「ゾラやモーパッサンを読んでいるれば気づくことだが、今日の芸術はまちがいなくなにかしら豊かで喜びに満ちたものを望んでいる。ゾラやモーパッサンの作品はおそらく今まで言われたことのなかでもこのうえもなく嘆かわしいことも言っているけれども、同じような傾向が絵画の上でも主流になりはじめている。」(III.41)

ゴッホは生涯貧苦と無名の苦勞を味わい続けてきた。その彼が自然主義文学作家が好きだったことは、当然のこととみえるかもしれない。しかし彼がそこに読み取っていたのは現代生活の悲惨なものではない。ゾラたちの試みが人生の悲惨さを興味本位で描いて、いわば恐いもの見たさのブルジョワに提供しようとしたのではないことを、ゴッホはわかっていた。現代作家が、そしてゴッホ自身が小説に求めていたものは、そうした悲惨の中から人々がつかんで

ゆこうとする現実の幸福の姿だったといえる。勤勉さのなかから必ず生まれてくるはずの未来を信じていた。たとえば彼は若いころから、そしてゴーギャンとの生活の失敗のあとでもまだ、画家の共同体への夢を失わなかった。そうした文学上の理想をゴッホ自身は絵画の場において引き継いでいこうとしていた。そしてそれが当時の絵画の傾向なのだというふうに彼の眼にはみえていた。それがたとえ美術史の流れのよくわかっていない彼の勝手な思い込みにすぎなかりと、そうした意味で彼の絵画には文学的意味がつねに内在しており、それが彼の絵のおもしろさをなしているといえる。

### 【註】

- (1) Georges Charensol, *Correspondance complète de Vincent van Gogh*, Gallimard/ Grasset, 1960. この書簡集からの引用箇所は本文中に記す。括弧内のローマ数字とアラビア数字は、全3巻中の巻数とページ数を示している。
- (2) 「ぼくは他人とのつきあいがあまり好きではない。時には訪問を交したり一緒にしゃべったりするのが苦痛で耐え難いことがある。」(I.403)
- (3) 『ジャン＝フランソワ・ミレーの生涯と作品』『遠近法論』
- (4) 1887年パリ作「フランス小説本とバラ」、1888年アルル作「フランス小説本」には各々20冊ほどの小説本が描かれているが、題名は描き込まれていない。題名が見えるのは次の絵である。括弧内は小説の発表年。  
 1885年ヌエネン作「聖書」：『生きる喜び』(84) (本は読み込まれてぼろぼろになっている)  
 1887年パリ作「3冊の本」：『娼婦エリザ』(77)『立派な人々』(86)『ボヌール・デ・ダム百貨店』(83) (最後の本だけ装幀が施されている、だれかから借りたのか)  
 1887年パリ作「石膏像とバラと2冊の小説本」：『ベラミ』(85)『ジェルミニー・ラセルトゥー』(65)  
 1888年アルル作「花瓶の西洋きょうちくとうと本」：『生きる喜び』(3年前のものほど痛んでいない、新たに買い求めたか)  
 1890年サン・レミ作「アルルの女」別名「ジヌー夫人」：『クリスマス物語』『アンクル・トムの小屋』(『物語』は英語、『小屋』は53年初訳の仏語である。アルル時代のヴァージョンでは題名が見えるようには描かれていない。この2冊を再読したと言っているのは89年3月末、アルルのヴァージョンを描いたのは88年11月。)  
 1890年オーヴェール・シュル・オワーズ作「ガシェ博士像」：『ジェルミニー・ラセルトゥー』『マネット・サロモン』(86)

- (5) 10代後半からの約20年間に読んだと思われる十九世紀小説本のなかで知られた作家のものを挙げてみる。ここには英仏語圏以外の小説、アンデルセンの童話、フランソワ・コペー、モーパッサン、リシュバン等の詩集、カーライル等の評論は含まれない。作者、作品とも記載が出てくる順に列挙してある。むろんこの順に読んでいったわけではない。ゴッホはこのほとんどを読んだと思われる。積読のような贅沢は彼には許されなかった。かなりの書は再読している。題名は邦訳のある場合はなるべくそれにしたがった。

ミシュレ『海』『鳥』『愛』『人類の聖書』『僧侶と女性と家族について』（『女性と宗教と僧侶』と誤記）『人民』『女』『フランス革命史』

エルクマン＝シャトリアン『新兵物語』『ワートルロー』『友フリッツ』（ゴッホはこの作者ではこの作品が一番好きらしい）『テレーズ夫人』『二人兄弟』『農民物語』『下士官物語』

エリオット『アダム・ビード』『急進主義者フィーリクス・ホルト』『ジョン・ハリファックス』『牧師館物語』『サイラス・マーナー』『ロモラ』『ミドルマーチ』  
ディケンズ『二都物語』『困難な時世』『オリヴァー・ツイスト』『マーティン・チャズルウィット』『リトル・ドリット』『エドウィン・ドルードの謎』『クリスマス物語』（『愚かれた男』）

ユゴー『死刑囚最後の一日』『ある犯罪者の物語』『93年』『ノートル・ダム・ド・パリ』『レ・ミゼラブル』『恐ろしき年』

バルザック『13人組物語』『幻滅』『ゴリオ爺さん』『夫婦の生態』『セザール・ピロトー』『ウジェニ・グランデ』『田舎医者』

ブロンテ『ジェーン・エア』『シャーリー』

ストウ『アンクル・トムの小屋』『我らが隣人』『妻と私』

ゾラ『ある愛の一頁』『パリの胃袋』『ナナ』『獲物の分け前』『ムーレ神父のあやまち』『ウジェヌ・ルーゴン閣下』『ごった煮』『ボヌール・デ・ダム百貨店』『居酒屋』（ゴッホはこの作が最高だという）『テレーズ・ラカン』『ジェルミナール』『制作』『生きる欲び』『大地』『夢』

ルモリエ『一匹の雄』『地上の人々』

ドーデ『亡命の諸王』『ナバブ』『サフォー』『福音史家』『アルプスのタルタラン』『陽気なタルタラン』『不滅の人』『ヌマ・ルメスタン』

ゴンクール兄弟『フィロメヌ修道女』『シェリ』『ジェルミニー・ラセルトゥー』『娼婦エリザ』『ザンガノ兄弟』『マネット・サロモン』

フローベール『ボヴァリー夫人』『ブヴァールとペキュシェ』『サランボー』

デュマ・フィス『椿姫』

モーパッサン『ベラミ』『モントリオール』『ピエールとジャン』『メゾン・テリエ』『水の上』『ミス・ハリエット』『バラン氏』『詩集』

ロチ『ロチ氏の結婚』『お菊さん』『島の漁師』

- ユイスマン『流れのままに』『所帯持ち』  
 リシュバン『セザリヌ』『しつこい女』『冒涇』（詩集）（『立派な人々』の記述はない）
- (6) Vincent van Gogh's poetry albums, Cahier Vincent 1, Rijksmuseum Vincent van Gogh, 1988.
- (7) ロングフェロー、ゲーテは各1詩編。その他、エミール・スヴェストル（1806-1854）、ルードヴィヒ・ウーラント（1787-1862）の名がみえる。この手帳の巻頭にある弟のテオが書き写した（無名の）作家は省略する。
- (8) Vincent van Gogh's poetry albums, id.
- (9) これはゴッホのした引用であり、原文からの写し残しもそのままにしてある。（ルーヴルにある）という挿入もゴッホ自身を加えたものである。
- (10) 日本聖書協会、共同訳。
- (11) 岩波文庫、畠中敏郎訳『アルプスのタルタラン』p.203
- (12) III. 8, 238, 300, 327.
- (13) 「ほくは短い時間で本を読み、そのごく明確な印象をとりだすという能力を獲得しはじめている。読書も絵画を見るのと同じことで、一気に迷わずその美を発見し、自分の評価の正しさを確信できるようなとけくない。」(I.221) 実際、弟からの仕送りの入った郵便が紛失するという事件があった時期に、彼はおそらく数日のうちに『ごった煮』と『93年』を読了している。(I.507-515)
- (14) 「墓地に続くでこぼこ道の両側は、木の幹やねじれた根っこが連なっている。そのねじれ具合のきてれつさは、アルバート・デューラーの「騎士と死と悪魔」に刻されたものを彷彿とさせる。」(I.176-7)  
 「クリスマス前、天候は暗く雪が降っていた。この土地はおどけ屋ブリュゲル（父）の中世絵画を思わせた。」(I.177)  
 「最初に彼（坑内監督）に会ったとき、ほくはメソニエのエッチングを思った、おまえも知っているだろう、「読書する人」というやつだ。」(I.184)
- (15) 「これらの人物たちは崇高でポエジーに満ちている。」(I.454)
- (16) ここでゴッホが「芸術家」という語で何を意味しているかわかりづらい、もし彼がすでにトルストイ作品に親しんでいたとするならば、彼がトルストイを読んだ形跡は書簡集にはない。その『宗教論』を読もうとはしていたが、ところがトルストイの作品がゴッホが真に求めていた芸術であろうことは疑いをいれないように思われる。ゴッホがこの作家の感化を受けずに亡くなったことが事実とすれば何か甚大な欠如のようにみえるのである。